



妙たえの光ひかり

通刊81号 復刊61号

2008年3月1日(季刊)

角田山妙光寺 発行

〒953-0011

新潟市西蒲区角田浜1056

TEL 0256-77-2025

ヒトリシズカ

誰がこんなロマンチックな名前をつけたのだろう。春浅いころ、境内から裏山に入ると山林の縁に咲いている姿が目に入る。名前の通り清楚で物静かという風情があり、日陰にひっそりと咲き、人知れず散っていくさまもまた名前に相応しいかもしれない。

源義経を偲びつつ頼朝の前で舞を舞った悲劇の愛妾・静御前の姿に見立ててこの名が付けられたという。別の名をヨシノシズカというのも同じ理由らしい。

二十センチほどの草丈で茎の先に緑色の葉が四枚つき、この葉に守られるように白いブラシのような花をつける。根から多数の茎が直立するから、数十本まとまって咲く。写真は四月初旬の裏山で撮ったもの。この季節は山野草が盛りとなり、続いて境内が桜、カイドウなど花で埋まる。

一人静負う子眠りてそつと歩く

香西照雄

俗信、迷信

小川 英 爾

最近テレビの影響でしょうか、以前は耳にしなかったような仏教とは無縁な話題がとても気にかかります。田舎の話でしょ？なんてことではなく、都市生活者のほうが迷信深いなんてこともあります。近頃言われた話、昔から言われてなかなか変わらない話、そのいくつかをまとめてみました。思い当たることはありませんか。

・法事は命日の前にやらなければいけない？

以前は全く聞いたことがなかったのですが、近ごろ特に耳にするようになりました。何処かで誰かが言い出したのだらうと思われる。テレビによく出る女性占い師でしょうか。

そもそも法事は故人の供養であると同時に、これを通して親族が血縁の絆を確認する意味合いもあります。ですからお斎といつて法要の後、皆さんで食事を共にしますが、これは法事を催す人が参列者に供養を施す修行の意味と、もうひとつ仏様、故人、親族が「同じ窯の飯を食う」こと

で連帯感を持つという意味があります。そんな訳で農村部の以前の法事は、収穫が終わり農作業が一段落した秋に集中していました。新米をお供えし皆で戴く感謝の気持ちもあつたのでしょう。また一方で漁村では漁に出られない冬に法事が行われたと聞きました。

いずれもそこでは故人の命日より、生きること懸命な毎日の生活が優先したのです。それでも亡くなられて間もない一周忌は、命日に近い日を選ぶことが多いのですが、三回忌以降では遺された家族の生活を優先された日取りでもなんら問題はありません。

ただ人間は怠け心が優先しがちです。多忙な現代社会では家族全員の都合を合わせるだけでも大変ですから、命日前にという締切日を設定し互いに歩み寄らないと、なかなか日取りが決まらないということなのだど理解されたら如何でしょう。

・お墓には墓相といって守るべき形や方角があり、これを破ると家族が不幸になる？

仏教上根拠のないまったくの迷信です。古い時代の中国にも似たような話があるものの、これは風水といって土地(墓地)が水害を受けない場所を選ぶといった、ある程度合理的な考え方だそうです。しかし日本の墓相学は昭和に入ってから急に盛んになったといわれ、墓石商売に結びつけた背景が見え隠れします。墓石の形や方角はその土地の地形や時代ごとにさまざまです。墓相研究者と自称する人は「何万件の資料に基づいた科学的云々」と言いますが、それでいて人により説がバラバラで、互いに相手を中傷する者ありさまざまです。その内容たるや、〇〇の墓は事業の失敗、家族内の揉め事、家が××になるなど、なかには差別的言葉を挙げるものまであって、例としてあげるものはばかられるほどです。占いの類にはいるのですが、むやみに恐怖心をあおるなど害悪ですらあります。

・友引の日に葬式をだすと友を引くといって、引かれるように関係者が続いて亡くなる？

その日の吉凶を占う日柄信仰というもので、江戸時代に普及した暦にさまざまな吉凶が書かれたことがはじまりです。友引はそのなかの六曜という、比較的新しく、それだけ広く普及した暦にあるものです。もとは中国製で日本に入ってから変化して、現在の先勝、友引、先負、仏滅、大

安、赤口の六通りを一定の法則にしたがって順繰りに当てはめたものです。説明は省きますが、その法則は聞けばそんなことかというほど、単純なものです。

これも占いそのものですが他の暦以上に普及したのは、単純でわかりやすかったことと、ある時期に仏教でも利用したせいだといわれています。友を引く友引というダジャレのような理解が広まったのも単純な話で、これもまったく根拠のない話です。

以前は友引には火葬場が休みということもありましたが、現在は公営の火葬場でそんなことを理由に休みところはないはずです。(注・東京の火葬場は大半が民営会社です)ただ友引の葬儀を嫌う方が圧倒的ですので、寺や葬儀社はこの日に会合や研修会を開くのが通例になっています。

あるお宅の事情で友引の葬儀にならせざるを得なかったことがありました。若かった私は心配ないと話したのですが、不安げな親族に葬儀社のお爺ちゃんが「こういうときは昔からご遺体にお人形さんを入れてるから心配ないよ」と語り、納得されたことを思い出します。理屈でなく知恵なんですね。

・仏壇に故人の写真を飾ると良くないことが起きる??

これも最近つとに耳するようになりました。テレビの影

響かと思いきや、ある伝統仏教教団が言っているらしいのです。檀徒のお宅で「よそのご住職の法話で聞いたけど本当ですか?」とよく尋ねられます。その理由として仏壇は呼んで字の如し、仏様をお祀りする壇であって、位牌はいいが写真は故人の成仏を妨げるからいけないと。理解に苦しむ話です。

確かに仏壇は仏の壇なのでその中心にご本尊があるので、そこに故人の写真を置くのは間違いです。二段目に位牌があり、その下に故人を偲ぶよすがとして生前の写真があることはなんら問題なく、折に触れ思い出してあげることは供養でもあります。

ただ写真があることでもいつまでも故人の思い出ばかりに浸り、日常生活に戻れない、立ち直れないということでは困ります。写真が思い出すよすがになっても、とらわれてしまう執着を引き起こすようでは大切な方も浮かばれないというのも一理あるでしょう。

・生前に自分の墓を建てる、生前に戒名を受ける、故人がいらないのに仏壇を買い求める、これらは早死になるからやってはいけない?

こういう話は以前から言われています。お寺が葬式や法事、お墓といったいわゆる人生の不祝儀を担当するよう江

戸時代に割り当てられたことが元にあるかもしれませんが。お寺に関わることはすべてが死につながることにようにイメージされてしまっています。お寺もそのように対応してきた責任があります。

でも本来の仏様の教えは、人生において避けられない苦しみに向き合って生きることにあります。そのための心構えを学び、心を鍛えるところに人間としての喜びを見つけていくことなのです。その修行を心に決めたときに決意の証として戒名を受けるのですから、亡くなってからでは遅いらいなのです。

そしてその修行を自宅でも行えるよう、お寺の出張所として家庭に仏壇が広まりました。位牌を納める所としての仏壇だから、故人もいないのに求めるのは早死にするという考え方は明らかに間違いです。ですから昔の人は「家を新築したら仏壇を入れなさい。仏壇のない家は納屋と一緒に」と教えました。

以前なら自分が亡くなった後、子孫が立派な墓を建ててくれる時代だったかもしれませんが。今は自分で準備する時代になったように思います。かの中国では生前に建てる墓を寿陵(じゅりょう)と言い、長命で縁起のいいことだとある、というのは真偽のほどは不明ですが。東南アジアでは親の元気なうちに子供たちが豪華な棺おけを贈る習慣が

あると現地でも聞きました。元気で長生きしてくださいという意味を込めてのことです。

・四十九日忌法要は三ヶ月に渡る日にやると不幸が続く？

命日が月の後半十四日以降だと、四十九日目は翌々月の一日以降となり、三月にまたがります。これを関西では嫌い、四十九日忌の法要を繰り上げて行うと聞きました。理由は三月（みつき）↓身付き、不幸が身にくっついてしまうということだそうです。説明の必要なしですね。

・葬式から戻ったら必ず塩を体にふらないといけない？

葬儀に参列すると「清めの塩」が配られたり、それを自宅に戻って体にかけてから家に入るといふ風習はいまだに残っています。一体何を清めるのでしょうか。昔の人たちは悪い霊が取り付いたために死者が出たと考え、それを家に入れないために塩で払うと考えたようです。また死は汚らしいこと不浄なこととして嫌いましたので、塩をふって不浄を払い去ろうとしました。これらは古い神道に近い考え方で、仏教ではありません。ですから近親者が亡くなるとしばらくは神社の鳥居をくぐらないという習慣もあるようです。

亡くなられた大切な親族の死が汚いこと、不浄なこと、嫌うことなどは仏教では決して教えません。昔の人の死への恐怖感は現代人以上だったかもしれません。今の私たちがとって、必ずやってくる死は考えたくもないこと、では済まされない時代に生きていくことを考えたいものです。

・遺骨はなるべく早くお墓に納めないと故人が成仏できない？

これもそのように思い込んでいる方が多いことに驚きます。まず日本にはその様な法律もないし、ずっと埋葬しないで傍に置いていても法に触れません。

いつ埋葬するかは地域の習慣で行われています。妙光寺の周辺では一周忌が大半ですが、すぐ隣の村では丸二年後の三回忌が普通です。最近では都市化した地域ほど四十九日での納骨が増えているようです。これは住宅事情や核家族化して日中誰もいなくなるといった家庭内事情が背景にあります。千葉には火葬場の帰りにお寺参りして次いで墓に納骨し、手ぶらで帰宅する地域もあります。土葬が日本の古い習慣ですから、葬式が終わればすぐに埋葬するのが本来の姿といえるかもしれません。

火葬が一般化して遺骨を手元に置くようになったのは明治の後半以降と言われています。その埋葬時期も地域でい

ろいろだったと思われます。大切な方を失い、いつまでも遺骨を傍に置きたいと願う気持ちは十分理解できます。ただそのことにいつまでも心がとらわれて、次なる自分の人生に歩みだせないことは、故人にも本人にも周囲にも気の毒なことです。遺骨ではなく、故人の思い出とともに生きていける覚悟ができたとき、それが埋葬のときではないでしょうか。無理に早める必要はまったくありませんが、いたずらに引き伸ばすことを戒めた言葉だとしてご理解ください。

・数珠が切れるのは不幸の前兆？

数珠の珠は木の実、石、貝、琥珀、金属など様々な品で作られています。これを繋いでいるのが絹のような糸ですから、長く使っていればいつかは切れます。しまいつばなしでどこかの葬式でしか使わないという方よりは、いつも使ってお参りされている方が糸の切れる確立が高くなるのは当然です。その方に不幸が訪れやすいとはとても思えません。

仮に数珠が切れても繋ぎ直して修復できるので、珠がバラバラと散乱しないよう注意することです。ことに珊瑚、琥珀や高価な石で作った数珠はなくして不足した珠を揃えるのが大変ですから、たまには糸を点検して切れる前に繋ぎ直しを心がけてください。妙光寺でも数珠屋さんをお世

話します。

・厄年ってお払いしないと災難を受ける？

男性の二十五才と四十二才、女性の十九才と三十三才。案外に科学的根拠のある話として最近は言われるようになりました。ひとつには体質が変化する年齢だそうです。男の二十五、女の十九は青年から中年への成熟期で、生物学的に結婚に適する年齢でもあるそうです。男の四十二才と女の三十三才は老化へのスタート年齢とか。

同時に前者が結婚等で家庭人として社会的に認められる年齢で、後者は社会の中心的役割を担う立場の年齢となり、その責任が重くのしかかってくるというのです。ですからその昔は厄年ではなく役年と書いたという話もあります。もつとも年齢の根拠に三十三(散々)、四十二(死に年)という語呂合わせもあるようですが。

身体的にも社会的にも負荷がかかるということは今昔も変わらないようです。そこでお払いを受けて仏様のパワーを戴きつつ、細心の注意と自覚をもって前向きに生きることはお勧めです。妙光寺でもお受けしています。厄年は数え年でやることをお忘れなく。最後は宣伝でオチとさせていただきます。

前寺工事ほか

・前寺建設工事着工

①正式には妙光寺塔頭「京住院」といいます

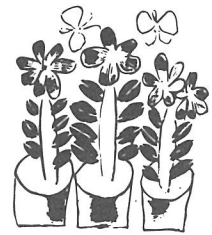
比較的規模の大きいお寺の敷地内には、付属のお寺があり、中心のお寺を本坊、小さい方を普通は前にあるので通称を前寺、正式には塔頭（たっちゅう）寺院といえます。江戸時代まで僧侶は独身を通じたので、本坊の住職が老後ここに隠居して暮らしたようです。妙光寺では三五〇年程前の第二十三世京住院日通上人（現在は五十三世）の隠居所に建てたのが始まりで、これが名前の由来だと想像できます。

その後は本坊に勤める役僧の住居となり、京住院は寺家（じけ）様とも呼ばれ、皆さんにとっても親しまれたお酒の大好きな役僧が家族で暮していました。それが



木の移植と道路付け替え工事が進行中

四十年前ほど前から無住になり、老朽化したので二十年余り前に解体したので、当時を知る高齢の檀徒の方々には懐



かしくもあり、前寺に寄せる思いは深いようです。

②篤志者の寄付で建てられます

故郷の巻町を離れて埼玉に住む河野さんはそんな昔を知るお一人で、子供がいないために安穩廟を求めたのが妙光寺とご縁の復活でした。ある日「遺産の一部を妙光寺さん」と思い、前寺を再建して建替え前の本堂の仏様をお祀りしてはどうでしょうか」との電話をいただきました。近年妙光寺を会場に葬儀を希望する方が増え、家族でゆつくりと過ごせる離れの部屋があればと話していた矢先のこと、大変ありがたうお受けしました。

③六月末には完成予定です

建設候補地が一本の木も切ってはいかない保安林指定地で、県の工事許可を得るのに丸一年かかりました。このたびようやく着工です。工事許可のために檀徒役員、また安穩会員のAさん等々に多大なご尽力をいただきました。またAさんには「この春退職なので退職金の一部で今回の事業に協力したい」と寄付金のお申し出までいただきました。

総事業費四千六百万で、建築工事三千万、残りが外溝、造園、諸経費、予備費です。工事は妙光寺に出入りの業者さんを中心に請け負ってもらい、三月初旬地鎮祭、六月末完成引渡しの手配です。落慶法要は役員会で協議して、次号でお知らせします。ここに安置する仏様が有志の方々のご協力で立派に修復が完成したことを前号でご報告しました。

④ 宿泊や家族葬などにご利用いただけます

面積が二十五坪で板敷きのお堂部分と、八畳と六畳の和室に台所、風呂がついた別荘風。境内に溶け込むように京都の庵寺のようなやさしい外観のお寺です。県の指導もあつて周囲は防風林で囲み、造園にも配慮します。

葬儀をする方が自由に使い、それまで看病で疲れた体に負担が少なくて冷たいような冷暖房完備で快適に過ごせます。また法事のお斎、宿泊にも対応したいと考えています。ご利用に関する詳細は改めてお知らせします。

・防火訓練

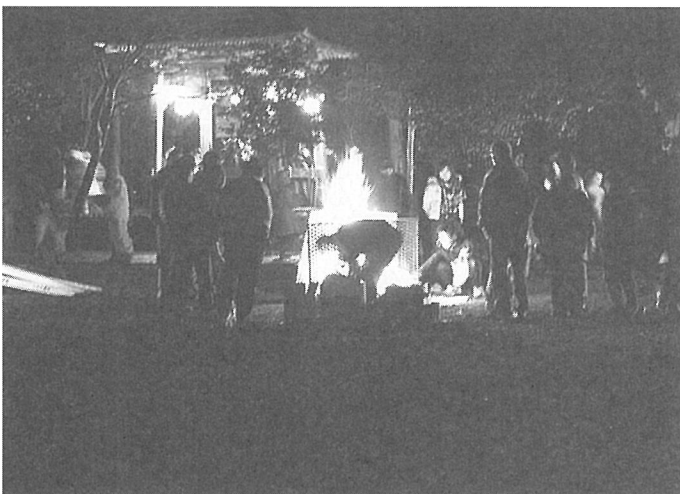
二月七日、防火訓練を行いました。妙光寺には四点の文化財があることもあつて、消防署による年一回の訓練と設備の点検をする査察があります。建物が全体に新しいので防災設備は整い、査察でも合格点をいただきました。



防火訓練

・除夜の鐘の賑わい

暮れの除夜の鐘が例年のように若い人を中心に二五〇人ほど集まりにぎわいました。特に今年から整理券を出したので順番が来るまでお焚き上げの火の回りで暖をとったり、テント内で甘酒、コンニャクを口にする人が目立ちました。「うちの方は吹雪で、孫がここに来たくて外を眺めては心配ばかりしているから無理



除夜の鐘

して出かけてきた。こっちは雪もなく穏やかなので驚いた」という声が聞こえてきました。

・角田浜のお経云

昨年冬、地元角田浜に暮らす次の世代の檀徒が日曜の夜に五回集まり、お経を練習する会を開きました。継続したいとの声が多くありましたので今年も集まり、おさらいをしてから次の段階に進む練習を三夜行いました。最終日には例によって持ち寄りの懇親会が、楽しく和やかな雰囲気ですり上がりました。

・大分市・神力寺本堂完成

九州大分市内の神力寺では老朽化した本堂の建替えをするに当たり、妙光寺の本堂の考え方に共感して同じ設計士に依頼しました。こちらの亀山住職が近所で先輩の菊池妙瑞寺住職の紹介により、妙光寺に毎年の夏応援に来て十年近くになるのがご縁です。三十台の若さですが百件余りの檀信徒の賛同を得て、県内大手

の建設会社の施工で三月九日落慶法要に至りました。さらに仏像もぜひ同じ方にと、滋賀県の石川仏師にやや小ぶりですが彫っていただき、見事に安置されました。

・本堂仏像の部分改修計画

いま本堂に安置の仏様五体は、二〇〇一年の本堂建替えの際に滋賀県在住の大仏師石川真水師の作によるものです。原木は十分に乾燥させた最高の檜です。一切の塗りをしない生地のままの仕上げです。またお釈迦様は大きいため一本では割れが入る可能性があり、寄木とって材質のいい部分だけを寄せ合わせであります。その結果心配された木肌の割れも全くなく、とても良い状態で七年が経過しました。

一方で自然のことですが日差しによる焼けが進み、白かった当初のころより茶色が濃くなり、背景の岩の赤茶色と同質で沈んで見えてしまいます。また寄木のため焼け方にムラがでて、手だけが白っぽいといった不自然な事態になりました。

た。お参りの方から指摘されることも多く、案じた石川仏師から七年目のメンテナンスとして、若干の塗りを施すことで焼けムラを補正する提案をいただきました。これは小さくとも割れが出れば補修するといった無償の保障の範囲だそうです。

ただせっかく滋賀まで運んでの作業ですので、これにあわせて背景の色に沈まない方策を考えてはどうかとの意見があり相談しました。その結果、五体の仏像の衣のひだの部分に金泥というつや消しで金の線を描くことと、お釈迦様の光背を今の丸い形から、一般的な舟型に作り変える案を検討中です。確かにこれかなり印象が変わります。

仮にそうなるとう修復作業中は本堂がカラになってしまうのですが、幸い前寺に安置する仏像があります。経費の見通しもないなかでの発案ですが、七月までなら修復されたこちらの仏像に留守番をお願いできるというのが、今回検討している理由でもあります。

おしらせ

・「ご判様」

鎌倉時代に佐渡配流の日蓮聖人が、無事に鎌倉へ戻れることを感謝して遺されたご判（印鑑）があり、これを江戸時代から毎年四月にご開帳してきたのが妙光寺の「ご判さま」です。昭和三十年代までは盛大な祭りとして、文字通り境内に参詣者が溢れかえりました。今はその面影を残すのみとなりましたが、日蓮聖人のご遺徳を偲び、本格的な春の訪れを告げる行事として続いています。特に今年は寒百日間の荒行を終えた二人のお上人が、水行の後に特別お加持を行います。どなたでも自由にお参りいただけますので、お出かけください。

今年の当番は巻・割前地区。地元角田浜の方たちにはのほり立と、当日のお輿かつぎ、それぞれにお手伝い宜しく願います。

期日 四月二十九日（祭日）

・祈願・回向のご案内

この「ご判さま」の「志納袋」を県内の檀信徒に同封しました。当日十時三十分までにお持ちいただくか、事前にお送りください。家内安全や身体健全といった祈願と、特別回向は十一時の大法要で読み上げてお札を差し上げます。施餓鬼塔婆は午後一時半の施餓鬼法要で塔婆を立てて読み上げます。

・お稚児さん募集

お練り（行列）と大法要に出仕していただくお稚児さんを募集しています。お子さんお孫さんどなたでも結構です。

・参籠修行の休止

お寺に一泊してお経の練習等を修行していただく「参籠修行」ですが、今期は日程調整が厳しいことと、住職の体調を考慮してお休みさせていただきます。悪しからずご了承ください。



・住職の講演会

以下の要項で住職の講演会があります。

「新潟市男女共同参画講演会」

演題…「自分らしい、さようなら」の形

—悔いのない私らしい準備—

期日…三月二十六日（水）午後一時三十分～三時三十分

会場…新潟市横越地区勤労者総合福祉センター（サンウイング

横越）

対象…どなたでも

申込…三月十七日までに新潟市江南区政策企画化へ電話（02

5-382-4619）で

生前契約の詳細ほか



生前契約の詳細

前号でお伝えしましたが生前契約のお問合せ、ご相談が増えていきます。これは本人の死亡後、親族に代わって葬儀の一切を妙光寺が取り仕切るものです。シングル、子供がいない、配偶者も兄弟も高齢、子供はいるが遠方に別居しているなどというときに頼れない等々さまざまな事情のある方がおいでで、とても喜ばれています。

具体的には、関係者から妙光寺へ本人死亡の電話連絡があると、妙光寺が信頼できる葬儀社に依頼して直ちにご遺体を病院などから妙光寺へ搬送することから始まります。その後契約内容に基づいて葬儀まで、あるいは埋葬まで責任を持って取り仕切ります。契約内容は葬儀の規

模や形態、また連絡先がある場合はその名簿を預かり通知するところまで、綿密な打ち合わせをして決まります。その内容で経費を積算して契約時に妙光寺がお預かりし、残金が生じた場合は指示された形で処理します。不足が生じても補填をお願いできませんので、余裕を持って積算します。

相談がまると「民法八九七条に基づく祭祀相続指定文書」という法的に効力のある文書にして取り交わします。預かったお金は預り証を発行し、預かり金口座で管理します。後日、本人の意思が変わって解約を希望するときは無条件に応じ、預かり金は全額返金します。ただし本人以外の申し出には応じられません。

県外からでも遺体の搬送は可能ですか

ら地域の限定はなく、現在東京、福島の方も契約されています。ちなみに東京からの遺体搬送費用は二十万円が相場です。このように距離や葬儀の形態など個別に事情が異なるので概算をお伝えできませんが、一般的な新潟市中心部からの搬送を含めた葬儀社の全費用は二十五万円位からとお考えください。それ以外の飲食とお布施は別です。

この生前契約は妙光寺以外の場所での葬儀は、現行の態勢ではお受けできません。また、葬儀の取り仕切りは親族がやるが妙光寺住職に葬儀をして欲しいという方は、生前契約の必要がなく檀徒になつていただくこととお受けしています。それでしたら県内県外どちらでもお伺いしています。その際の不明な点はなんなりとご相談ください。

また生前契約そのものがまだ新しい考え方によるもので、先進的な取り組みといえます。なかには対応に苦慮するような事例もあり、弁護士、研究者、同じ考えで取り組むお寺や団体と連携を取りつつ進めていることを申し添えておき

ます。

・会員Hさんの歌

会員のHさん姉弟は東京と神奈川にお住まいですが、ご両親のお墓参りにたびたびおいでになります。新潟に住んでおられたお母さんがご主人の死を期に安穩廟を求め、五年前にそのお母さんも亡くなられました。先々新潟に戻る予定もないことから、新潟市内の思い出の家の処分を決断、このたびすべてが完了したことを墓前報告にこられました。その際いただいた「挽歌・新潟」と題された手書きの小さな歌集に心打たれましたので、一部ですがご紹介させていただきます。五十台前半の弟さんの作です。

.....

新潟で生まれ、育ちました。そのうち中学一年から高校卒業までの六年間を過ごし、その後の約三十年少々は常に「新潟の実家」としていた家を、先日処分しました。父と母を共に見送り、誰も住むことがなくなった家を七年近くも放つて

おいた末の、ようやくの決心でした。

今年の正月明けからほぼ毎週のように週末に新潟に帰り、家財の移動や処分にあたりました。いろいろと溜め込んだものをひっくり返すうちに、父母の最期に際して詠み散らした拙い歌稿が目にとまりました。今回の家の納めに際してのものも加え七首づつ、計二十一首を、自分の中で一つの記念としてまとめました。(紙数の都合で一部だけのご紹介です。ホームページに全文掲載しました)

父を送る

病床を動けぬ父がわが背に

金はあるかと問うて見送る

もはや父と交わすあたわぬ晩酌を

夜汽車の窓に映して飲まむ

母を送る

一日の無事平穏を感謝して

ハナマルと言ふ病院の朝

病む母にあまりに広き空のあり

車椅子押す信濃川土手

家を送る

明日はもう空っぽになるこの部屋の

ストーブがまた給油求める

幼より淋しく聞きし松籟が

父母の墓守る故郷新潟



・今年フェスティバル

十九年目を迎える今年のフェスティバル安穩は、八月三十日(土)の予定です。内容は現在スタッフで検討を進めています。



アンケートご協力への御礼

同志社女子大学大学院生

岡田真季

昨年末のアンケートお願いに対しましては、お忙しい時期にも関わらずご協力いただきありがとうございます。お陰をもちまして貴重なデータを得ることが出来ました。今後の論文成稿に大いに活用させていただく所存でございます。

皆様一人一人に、お礼を申し上げなければならぬのですが、この場をお借りして御協方に深謝致しますとともに御報告させて戴きます。

【アンケート結果について抜粋のご報告】

六十%の回収率でした。

五十代、六十代頃にお墓の購入を考へる方が最も多く、この時期にご自身の死後の行き先を意識するようです。安穩廟

に決めた理由としては「跡継ぎ不要であるから」と回答された方が六八%でした。このうち継承に問題がある方はもちろん、ごどもへの負担を考へての購入が三九%でした。

また安穩廟の値段について、「妥当」と回答された方が最も多かったです。既存のお墓（家の墓）と比べると断然安価ではありますが、近年では継承を不要とする形の墓が増え世間に広く認知されてきたことから、「妥当」の回答が多く得られたのだと言えます。比べる対象が家の墓だけではなく増えてきたと言うことです。家の墓を望みますか、という質問に対しては「どちらでも」「望まない」という方が五八%という結果でした。

これらのことから様々な形態のお墓や葬法が出現する中、多数の方が継承、永続に拘らない自分の求める形を自由に選択するようになってきたことがわかりました。

▲行事案内▼

・春のお彼岸法要 三月二十日(祭日)

午前 十時三十分 安穩廟法要

十一時 彼岸会中日法要

十二時 お齋

午後 一時 お説教(住職)

お彼岸とは春秋年二回、昼と夜の時間が同じになるこの日(中日)をはさんだ七日間、心の偏りをなくすために仏様の教えを実践する、いわば「仏道修行週間」です。自分勝手な心を謹み、他者へのいたわりの心をもち、教えを守り穏やかな気持ちで正しく物事を見ることに努めること。これが目標です。まず本堂のご本尊にお参りし、この目標を思い出したうえで穏やかな気持ちになつてお墓参りをいたしましょう。

中日お寺ではゆっくり心ゆくまで過ごしていただけます。お齋はどなたでも当日受付でお申し込みのうえ、召し上がっていただけます。お出かけください。

・「び判さま」 四月二十九日(祭日)

午前 八時三十分 受付開始

詳細は別紙で



あ
と
が
き



県外の講演先で体調不良を感じ、戻った駅からすぐかかりつけの医院に直行したら三十九度の熱でインフルエンザと診断。三日後には看病の妻にもすっかり移し、ふたりで枕を並べてうなっていました。

日帰り参拝旅行のご案内もありこれ以上発行を遅らせることもできないし、予定していた方を訪ねることができず「信心のページ」が取材できません。また皆さんお楽しみみの「寺庭から」もお休み。病み上がりで、書き溜めておいた分を整理するのが精一杯の今号です。ことに丈夫が取り柄の妻は創刊以来初めての休載です。どうぞご了承いただき、皆様もお気をつけください。

(小川)